



## しきい値ルールの設定

このセクションでは、次の点について説明します。

- [しきい値ルールの設定 \(1 ページ\)](#)
- [しきい値ルール \(1 ページ\)](#)
- [TelePresence エンドポイント しきい値の設定—デバイス レベル \(4 ページ\)](#)
- [TelePresence エンドポイント しきい値の設定—グローバル \(5 ページ\)](#)
- [会議のトラブルシューティングに使用するしきい値の設定 \(6 ページ\)](#)
- [TelePresence エンドポイントの自動トラブルシューティングを有効化する \(7 ページ\)](#)
- [デバイス プールのしきい値の概要 \(7 ページ\)](#)
- [デバイス プールしきい値の編集 \(9 ページ\)](#)
- [音声通話グレード設定の概要 \(10 ページ\)](#)
- [Dynamic Syslog の追加 \(10 ページ\)](#)
- [相関ルール \(13 ページ\)](#)
- [カスタム アラートの作成 \(17 ページ\)](#)
- [System \(20 ページ\)](#)

## しきい値ルールの設定

このセクションでは、ビジネスニーズに合わせてアラームやイベントをカスタマイズする方法について説明します。

## しきい値ルール

特定のパラメータが事前に定義されたしきい値を超えた場合、イベントを生成するようにデバイスを設定できます。

**Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合**

次で設定を実行できます。[アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [しきい値ルール (Threshold Rules)]。

しきい値ルールのページには、[Basic] と [Advanced] の 2 つのタブがあります。[Basic] タブには、Cisco Prime Collaboration Assurance で生成または抑制できるインライン イベントが一覧表示されています。

[Advanced] タブには有効なイベントがすべて表示され、ユーザはカスタムイベントを作成することもできます。カスタムイベントを作成するには [Add Event] をクリックし、ドロップダウンからクラスタまたはデバイスを選択し、必要な詳細情報を入力して [Save] をクリックします。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以降の場合

これらの両方のタブに表示される各イベントに対して、イベントを展開して [Custom Rule] をクリックすると、カスタムのしきい値を追加または編集することができます。[Basic] タブでは、選択したデバイスタイプに基づきしきい値のみを作成できますが、[Advanced] タブでは、アラートのスケジューリング、設定の頻度、重大度など、作成したしきい値にルールを設定することもできます。カスタムのしきい値ルールはデバイス レベルまたはデバイス タイプ レベルで追加、編集、削除できます。すべてのデバイスに適用する変更の場合は、[Apply for All Devices] チェックボックスをオンにしてください。

[Basic] タブおよび [Advanced] タブの両方で、[電子メールのメモ (Notes for Email)] 用のイベントに関する追加情報を追加でき、メモは 1000 文字以内で作成します。また、[編集 (Edit)] や [削除 (Delete)] のリンクを使用して、[電子メールのメモ (Notes for Email)] を編集または削除することもできます。メモを編集する場合は、少なくとも 1 文字を [電子メール用メモ (Notes for Email)] に残しておきます。この追加情報は、通知として電子メールで送信されます。

ドル (\$)、縦線 (|)、チルダ (~) などの特殊文字を [電子メールのメモ (Notes for Email)] に追加することは推奨されていません。

[Advanced] タブで [Custom Rule] をクリックすると、[Add Alert Settings] ページが表示されます。[デバイス タイプ (Device Type)]、[クラスタ (Cluster)] を選択して [次へ (Next)] をクリックします。[Add Threshold Rules] タブに必要な詳細情報を入力して [Save] をクリックします。

イベントとしきい値の追加だけでなく、次の表に記載されている処理も実行できます。

アクション	Basic	Advanced
-------	-------	----------

<p>重大度の変更</p>	<p>はい</p> <p>名前のチェックボックスをオンにする—すべてのイベントを選択するか、選択するイベントのチェックボックスをオンにして、<b>[重大度の変更 (Change Severity)]</b> をクリックします。</p>	<p>はい</p> <p>名前のチェックボックスをオンにする—すべてのイベントを選択するか、選択するイベントのチェックボックスをオンにして、<b>[重大度の変更 (Change Severity)]</b> をクリックします。</p> <p><b>[Custom Rule]</b> オプションを使用してカスタムしきい値の重大度を変更することも、<b>[Edit Threshold]</b> オプションを使用してカスタム イベントの重大度を変更することもできます。</p>
<p>イベントの生成または抑制</p>	<p>はい</p> <p>名前のチェックボックスをオンにする—すべてのイベントを選択するか、選択するイベントのチェックボックスをオンにして、<b>[生成 (Raise)]</b> または <b>[抑制 (Suppress)]</b> をクリックします。</p>	<p>はい</p> <p>名前のチェックボックスをオンにする—すべてのイベントを選択するか、選択するイベントのチェックボックスをオンにして、<b>[生成 (Raise)]</b> または <b>[抑制 (Suppress)]</b> をクリックします。</p>
<p>しきい値の生成または抑制</p>	<p>はい</p> <p>イベントを展開してしきい値を選択し、ドロップダウンから <b>[生成 (Raise)]</b> または <b>[抑制 (Suppress)]</b> を選択します。</p>	<p>はい</p> <p>イベントを展開してしきい値を選択し、ドロップダウンから <b>[生成 (Raise)]</b>、<b>[抑制 (Suppress)]</b>、または <b>[条件付き (Conditional)]</b> を選択します。</p>
<p>既存のしきい値の編集、リセット、および削除</p>	<p>いいえ</p> <p>しきい値の設定は編集またはリセットできますが、削除はできません。</p> <p>しきい値を編集またはリセットするには、イベントを展開してしきい値の設定を編集し、<b>[Save Changes]</b> をクリックします。</p>	<p>はい</p> <p>しきい値を編集またはリセットするには、イベントを展開してしきい値の設定を編集し、<b>[Save Changes]</b> をクリックします。</p> <p>削除できるのはカスタムのしきい値のみです。しきい値を削除するには、イベントを展開して、しきい値を選択し、<b>[Delete]</b> をクリックします。</p>

イベントの編集または削除	いいえ	はい イベントを展開し、設定を編集して <b>[Save]</b> をクリックします。  削除できるのはカスタム イベントのみです。イベントを削除するには、チェックボックスをオンにして <b>[Delete]</b> をクリックします。
イベントの複製	いいえ	はい <b>[クローン (Clone)]</b> をクリックして詳細を入力し、 <b>[保存 (Save)]</b> をクリックします。  (注) 複製オプションは、CVP および Unified CCE デバイスに対してのみ使用できます。このオプションは、Communication Manager、Media Sense、IM and Presence、Finesse などの他のデバイスタイプのイベントについては無効です。

## TelePresence エンドポイント しきい値の設定—デバイス レベル

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以前の場合

しきい値をグローバル レベルで適用しない場合は、次の手順を実行して、デバイス レベルで Cisco TelePresence エンドポイントのしきい値を設定します。

**ステップ 1** 選択 [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [しきい値ルール (Threshold Rules)]。

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [しきい値ルール (Threshold Rules)]。

**ステップ 2** [基本 (Basic)] タブで、[ジッター (Jitter)]、[パケット損失 (Packet loss)]、[遅延イベント (Latency event)] を展開し、しきい値を [やや重大 (Minor)]、[重大 (Major)]、[深刻 (Critical)] に変更します。イベントを発生させる、または抑制するオプションもあります。

**ステップ 3** [保存の変更 (Save Changes)] をクリックします。

あるデバイスタイプのすべてのデバイスに変更を適用することも、選択したデバイスに変更を適用することもできます。これを行うには、[カスタムルール (Custom Rule)] をクリックして、デバイスタイプを選択します。すべてのデバイスに適用するには、この [タイプ (Type)] の [すべてのデバイス (All Devices)] を選択します。選択したデバイスに変更を適用するには、[デバイスの選択 (Select Devices)] をクリックし、選択するデバイスを選び [保存 (Save)] をクリックします。

デバイスを検索するには、[表示 (Show)] ドロップダウンリストから [簡易フィルタ (Quick Filter)] を選択し、そのデバイスのホスト名または IP アドレスを入力します。

---

## TelePresence エンドポイント しきい値の設定—グローバル

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以前の場合

しきい値がすべての TelePresence デバイスの Rx パケット損失、ジッター、遅延用に設定された制限を超える場合のように、Cisco Prime Collaboration Assurance を設定できます。

TelePresence エンドポイントのしきい値を設定するには、次の手順を実行します。

---

**ステップ 1** 選択 [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [会議パスのしきい値設定 (Conference Path Threshold Settings)]。

**ステップ 2** [Rxパケット損失 (Rx Packet Loss)]、[平均期間のジッター (Average Period Jitter)]、[DSCP] の値を変更し、[保存 (Save)] をクリックします。

しきい値のポーリング間隔を変更することもできます。値をデフォルトにリセットする場合は、[デフォルトにリセット (Reset to Default)] をクリックします。

TelePresence しきい値が定義された値を超える場合、自動トラブルシューティングの開始を有効にすることができます。次に進む: [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [しきい値ルール (Threshold Rules)] [基本 (Basic)] タブで、[ジッター (Jitter)]、[パケット損失 (Packet loss)]、[遅延イベント (Latency event)] を展開し、[自動トラブルシューティング (Automatic Troubleshooting)] ドロップダウンリストから [やや重大 (Minor)]、[重大 (Major)]、

[深刻 (Critical)] を選択します。無効にするには、ドロップダウン リストから [無効 (Disabled)] を選択します。

### 次のタスク

Cisco TelePresence エンドポイントをデバイス レベルで設定する方法の詳細については、『[Cisco Prime Collaboration Assurance ガイド - Advanced, 11.x](#)』の「「TelePresence エンドポイントのしきい値の設定：デバイス レベル」」セクションを参照してください。

## 会議のトラブルシュー트에使用するしきい値の設定

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

Cisco Prime Collaboration Assurance でしきい値を設定すると、パス内のメトリック違反を表示したり、すべての TelePresence デバイスに対し、しきい値が Rx パケット損失、ジッター、または遅延に対して設定された制限を超えた場合に自動トラブルシューティングを開始したりできます。

TelePresence エンドポイントのしきい値を設定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** 選択 [アラームおよびレポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [会議パスのしきい値設定 (Conference Path Threshold Settings)]。  
[会議パスのしきい値設定 (Conference Path Threshold Settings)] ページが表示されます。
- ステップ 2** パス統計の吹き出しの色を変更する場合は、[メモリ使用率 (Memory Utilization)] と [Rx パケット損失 (Rx Packet Loss)] の値を変更します。  
  
また、パス内の任意のメトリック違反について、[CPU 使用率 (CPU Utilization)]、[平均期間のジッター (Average Period Jitter)]、および [DSCP (DSCP)] の値を変更することもできます。すべてのデバイスに対し、しきい値が [Rx パケット損失 (Rx Packet Loss)]、[平均期間のジッター (Average Period Jitter)]、または [DSCP (DSCP)] に設定された制限を超えると、青色のバッジ情報アイコンが [パスビュー (Path View)] と [クイックビュー (Quick View)] に表示されます。
- ステップ 3** (省略可) ポーリング間隔を変更する場合は、[フロー統計のポーリング間隔 (Statistics Polling Interval)] の値を変更します。
- ステップ 4** [保存 (Save)] をクリックします。  
  
値をデフォルトにリセットする場合は、[デフォルトにリセット (Reset to Default)] をクリックします。

# TelePresence エンドポイントの自動トラブルシューティングを有効化する

## Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 以降の場合

次の手順を実行して、しきい値がパケット損失、ジッター、遅延に定義された値を超える場合に会議の自動トラブルシューティングを有効にします。

### 手順の概要

1. 選択 [アラーム & レポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [Event Customization (イベントのカスタマイズ)] > [しきい値ルール (Threshold Rules)]。
2. [基本 (Basic)] タブで、[ジッター (Jitter)]、[パケット損失 (Packet loss)]、[遅延イベント (Latency event)] を展開し、[自動トラブルシューティング (Automatic Troubleshooting)] ドロップダウンリストから [やや重大 (Minor)]、[重大 (Major)]、[深刻 (Critical)] を選択します。

### 手順の詳細

**ステップ 1** 選択 [アラーム & レポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [Event Customization (イベントのカスタマイズ)] > [しきい値ルール (Threshold Rules)]。

**ステップ 2** [基本 (Basic)] タブで、[ジッター (Jitter)]、[パケット損失 (Packet loss)]、[遅延イベント (Latency event)] を展開し、[自動トラブルシューティング (Automatic Troubleshooting)] ドロップダウンリストから [やや重大 (Minor)]、[重大 (Major)]、[深刻 (Critical)] を選択します。

無効にするには、ドロップダウンリストから [無効 (Disabled)] を選択します。

## デバイス プールのしきい値の概要

デバイス プールは、デバイスの論理グループです。デバイス プールは、たとえばデバイスが配置される領域など、デバイスに割り当てることができる一連の共通した性質を定義する便利な方法を提供します。

Cisco Prime Collaboration Assurance 内では、デバイス プールはクラスタ検出の完了後のみに表示されます。しきい値ウィンドウにデバイス プールが1つも表示されない場合は、実行するインベントリをスケジュールします。デフォルトでは、クラスタデバイス検出はスケジュールされていません。



- (注) デバイス プールに接続するデバイスがない場合、Cisco Prime Collaboration Assurance は、クラスタ デバイス検出が完了したとしても、デバイス プールを表示されません。

でのデバイス プールのしきい値設定により、ユーザが集約イベントの量を設定できます。

- デバイス プールのしきい値のいずれかのパーセンテージでの設定をデフォルト設定または現在の設定から上げると、受け取る集約イベントの量が減ります。
- デバイス プールのしきい値のパーセンテージでの設定をデフォルト設定または現在の設定から下げると、そのデバイス プールからより多くの集約イベントを受け取ることとなります。

影響を受けた電話機の数やしきい値と同じである場合、Cisco Prime Collaboration Assurance は、1 つのサービス品質イベントを発生させます。

たとえば、デバイス プールに 100 台の電話が含まれており、10 台の電話がネットワークの問題による影響を受けたとすると、デバイス プールのしきい値が 10% の場合に、このデバイス プールについて 1 つの集約イベントを受け取ることとなります。

集約イベントが 1 つ発生した後は、そのイベントがクリアされるまで別の集約イベントは一切送信されません。集約イベントをクリアするには、まず個々のデバイス イベントまたはサービス品質イベントをすべてクリアする必要があります。



- (注) "ServiceQualityThresholdCrossed" イベントの場合、Cisco Prime Collaboration Assurance はしきい値を少数から整数へと四捨五入します。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.6 の場合



- (注) "ServiceQualityThresholdCrossed" と "PhoneUnregThresholdExceeded" イベントの場合、Cisco Prime Collaboration Assurance はしきい値を少数から整数へと四捨五入します。

Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードで導入した場合、表示されたデバイス プールは、グローバル [顧客選択 (Customer Selection)] フィールドで選択したお客様に属します。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 12.1 以降の場合



- (注) "ServiceQualityThresholdCrossed" と "EndpointUnregThresholdExceeded" イベントの場合、Cisco Prime Collaboration Assurance はしきい値を少数から整数へと四捨五入します。

Cisco Prime Collaboration Assurance を MSP モードで導入した場合、表示されたデバイス プールは、グローバル [顧客選択 (Customer Selection)] フィールドで選択したお客様に属します。



Cisco Prime Collaboration Assurance は、これらのデバイス プールのしきい値イベントを、サービス レベルのイベントではなくデバイス イベントとみなします。

## デバイス プールしきい値の編集

Cisco Prime Collaboration Assurance を使用してデバイス プールのしきい値を表示および設定するには、次の手順を実行します。

**ステップ 1** 選択 [イベントのカスタマイズ (Event Customization) ] > [相関ルール (Correlation Rules) ]。

**Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合**

移行方法 [アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration) ] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization) ] > [相関ルール (Correlation Rules) ]。

**ステップ 2** EndpointUnregThresholdExceeded または ServiceQualityThresholdCrossed イベントを選択します。

このウィンドウにデバイス プールが 1 つも表示されない場合は、実行するクラスタ インベントリをスケジュールします。

**ステップ 3** 表示または編集するデバイス プールの横にあるチェックボックスをオンにします。

**ステップ 4** [Edit] をクリックします。

**ステップ 5** 現在のデフォルトのしきい値を編集するには、次の手順を実行します。

- a) グループを選択して、デフォルトのしきい値を変更し、[編集 (Edit) ] をクリックします。
- b) [電話登録解除しきい値/サービス品質しきい値 (Threshold/Service Quality Threshold) ] ダイアログボックスで、しきい値を編集し、[保存 (Save) ] をクリックします。

すべてのパラメータ タイプを Cisco Prime Collaboration Assurance のデフォルト設定にリセットするには、次の操作を実行します。

- c) すべてのデバイス プールまたは CME のチェックボックスをオンにして、[元に戻す (Revert) ] をクリックします。
- d) [保存 (Save) ] をクリックします。

変更がデータベースに保存されます。ただし、まだ IP ファブリックに適用されていません。

このタイプの集約イベントが発生したときに自動的に通知されるようにするには、このイベントが発生したときに電子メールが送信されるように通知を設定します。電子メール通知の設定方法の詳細については、『[Cisco Prime Collaboration Assurance ガイド : Advanced](#)』の「通知の設定」を参照してください。

## 音声通話グレード設定の概要

音声品質の変化は、Severely Conceal Seconds Ratio (SCSR) (%) に基づいて実行されます。これは、MOS ベースのグレーディングよりも、通話全体で品質を向上させることができます。また、特に広帯域コーデックなど、さまざまな音声コーデックもサポートしています。MOS から SCSR (%) への移行に関する詳細については、『[Cisco Prime Collaboration Assurance および Analytics : VoIP コールの効率性と信頼性のグレードに関するホワイトペーパー](#)』を参照してください。

通話は、通話の長さに基づきロング コールまたはショート コールとして分類されます。通話時間が 20 秒以上のものはロング コール、20 秒未満のものはショート コールとされます。

ロング コール SCSR (%) とショート コール SCSR (%) のしきい値は更新できます。ショート コール SCSR (%) とロング コール SCSR (%) のしきい値設定は異なります。次の表には、利用可能な通話グレードの詳細が示されています。

通話グレード	説明
Poor	通話の SCSR (%) 値がロング コール SCSR (%) またはショート コール SCSR (%) のしきい値よりも大きい場合、通話グレードは Poor です。
Acceptable	通話の SCSR (%) 値がロング コール SCSR (%) またはショート コール SCSR (%) のしきい値以上の場合、通話グレードは Acceptable です。
Good	通話の SCSR (%) 値がロング コール SCSR (%) またはショート コール SCSR (%) のしきい値よりも下回る場合、通話グレードは Good です。

ロング コール SCSR (%) またはショート コール SCSR (%) のしきい値を設定するには、[アラームおよびレポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [CDR 分析の設定 (CDR Analysis Settings)] > [音声コールグレードの設定 (Configure Voice Call Grade)] を選択して、適切なフィールドにしきい値を入力します。しきい値をデフォルト設定に戻すには、[デフォルトにリセット (Reset to Default)] をクリックします。

## Dynamic Syslog の追加

Cisco Prime Collaboration Assurance では、サポートされていない syslog を追加できます。Cisco Prime Collaboration Assurance で syslog を使用する前に、デバイスから正確な syslog 詳細を取得する必要があります (たとえば、正確な syslog 名を入力するなど)。入力する syslog 名はイベント名として使用されます。

syslog をクリアする必要がある重大度と時間を設定できます。



(注) Dynamic Syslog は、TP\_CONDUCTOR と Cisco 以外のデバイスを除くすべてのデバイスをサポートします。



(注) Syslog 通信は UDP を介してサポートされます。

次のような syslog を追加しないことを推奨します。

- Syslogs は、大量に生成されることがあるため、Cisco Prime Collaboration Assurance 過度の負荷がかかる可能性があります。
- 20 を超える syslog。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以降の場合

イベントまたはアラームに関する追加情報を [電子メールのメモ (Notes for Email)] に追加できます。メモは1000文字以内でなくてはなりません。また、[編集 (Edit)] や [削除 (Delete)] のリンクを使用して、[電子メールのメモ (Notes for Email)] を編集または削除することもできます。メモを編集する場合は、少なくとも1文字を [電子メール用メモ (Notes for Email)] に残しておきます。この追加情報は、通知として電子メールで送信されます。

ドル (\$)、縦線 (|)、チルダ (~) などの特殊文字を、[電子メールのメモ (Notes for Email)] に追加することは推奨されていません。

syslog を追加するには、次の手順を実行します。

**ステップ 1** [アシュアランス管理 (Assurance Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [Syslog ルール (Syslog Rules)]。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [アラームおよびレポート管理 (Alarm & Report Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [Syslog ルール (Syslog Rules)]。

**ステップ 2** [Add Event] をクリックします。

[新しいSyslogイベント (New Syslog Event)] ウィンドウが開きます。次を入力します。

- Syslog 名
- イベントの説明
- イベントの重大度
- Event Clear Interval

**ステップ 3** (任意) [発生ごとにイベントを生成する (Raise Event for Each Occurrence)] チェックボックスをオンにします。

このオプションは慎重に使用してください。Cisco Prime Collaboration Assurance によって、syslog ごとにイベントが生成されます。この場合、syslogs に毎回固有の詳細情報が表示されていれば、これは実現可能な選択肢です。

**ステップ 4** [保存 (Save)] をクリックします。

次の操作を実行できます。

- [編集 (Edit)] オプションを使用してイベント名、重大度を変更し、[発生ごとにイベントを生成する (Raise Event for Each Occurrence)] チェックボックスをオンまたはオフにします。
- syslog 名またはイベントの重大度をカスタマイズする。これを行うには、[イベントのカスタマイズ (Event Customization)] ページに移動します。詳細については、『Cisco Prime Collaboration Assurance Advanced - ガイド』しきい値ルールの設定 (1 ページ) の

#### 例

以下は、クラスタにバックアップされていない ITLRecovery 証明書がある場合に発生する、サポート対象外の syslog の例です。

次の値を入力します。

- Syslog 名 : ITLRecoveryCertBackup
- イベントの説明 : ITLRecoveryCertBackup イベント
- イベント重大度 : メジャー
- イベントのクリア間隔 : 1 時間



(注) イベントの重大度とイベントのクリア間隔の値は設定可能です。

<187>9009: Jul 31 2017 16:05:38.777 IST :%UC\_CERT-4-ITLRecoveryCertBackup: %[Message=][AppID=Cisco Certificate Monitor][ClusterID=ccm234][NodeID=cucm107886234]: このクラスタには、バックアップされていない ITLRecovery 証明書があります。クラスタ再構成操作の後に、クラスタ内のすべての電話から ITL ファイルを手動で削除する必要がないように、この証明書の手動バックアップを取ることを推奨します。

## 相関ルール

接続されているデバイスからイベントが発生すると、Cisco Prime Collaboration Assurance は相関ルールを適用します。次の表では、あるデバイスが、指定された時間枠内の特定の頻度でイベント A とイベント B（または単一イベント）を発生させた場合に、Cisco Prime Collaboration Assurance がこれらのイベントを相互に関連付け、アラームを生成することについて説明しています。アラームは 24 時間以内に自動でクリアされます。

たとえば、使用率のしきい値が変更されるたびに、Cisco Prime Collaboration Assurance は High Utilization イベントを生成します。高使用率イベントが 20 分間の間に 2 度発生した場合、High Utilization Detected アラームが発生します。

次に、Cisco Prime Collaboration Assurance の定義済みの相関ルールを示します。

Cisco Prime Collaboration Contact Center Assurance ライセンスを追加すると、特定の相関ルールを、Cisco Prime Collaboration Contact Center Assurance に対して排他的に適用できます。詳細については、『[Cisco Prime Collaboration Contact Center Assurance ガイド](#)』の「「Contact Center の相関ルール」」のセクションを参照してください。

相関ルールの名前	アラームを発生させる主なイベント	主なイベントが原因で発生する現象イベント	相関アラームの名前	相関アラームが発生するタイミング	主なイベントと現象イベントを受信する（最小）時間枠	発生回数
Call Throttling Detected	Code Yellow、CpuPegging	NA	CodeYellow	両方のメインイベントが発生する。	20	1
Interface Flapping	OperationallyDown、OperationallyDown cleared	NA	Interface Flapping	Operationis Down が 3 インスタンス以上の場合、OperationallyDown cleared イベントが代わりに発生します。	20	3

相関ルールの名前	アラームを発生させる主なイベント	主なイベントが原因で発生する現象イベント	相関アラームの名前	相関アラームが発生するタイミング	主なイベントと現象イベントを受信する（最小）時間枠	発生回数
Repeated Location Bandwidth Out Of Resource	LocationBWOutOfResource	NA	Repeated Location Bandwidth Out Of Resource	LocationBWs-OutOfResourceが、3インスタンス以上の場合に Cisco Unified Communications Manager で発生します。	20	3
WAN Link Outage Detected	Unresponsive	NA	Wan Link Outage Detected	Unresponsive イベントがトリガーされた場合。	10	NA
(注) このルールは、ユーザインターフェイスから編集したり削除したりすることはできません。						
VM Down	VMDown	Unreachable	VMDown	ICMP ポーリングに基づき、VMDown トラップを vCenter から受信し、VM に対する Unreachable イベントを受信した場合。	5	NA

相関ルールの名前	アラームを発生させる主なイベント	主なイベントが原因で発生する現象イベント	相関アラームの名前	相関アラームが発生するタイミング	主なイベントと現象イベントを受信する（最小）時間枠	発生回数
ESX Host Down	HostConnection Failure	Unreachable、VMDown	ESXHost ダウン	HostConnection Failure  トラップをvCenter から受信し、ICMPポーリングに基づき、ESXHost に対する Unreachable イベントを受信した場合。	5	NA
Network Down	NetworkConnectivity Lost、LostNetwork Connectivity ToDVPorts	Unreachable	ネットワーク ダウン	ICMP ポーリングに基づき、主なイベントのいずれかが発生し、ESXHost に対する Unreachable イベントを受信した場合。	5	NA
UCS Chassis Down	ChassisInOperable、ChassisIOCardInaccessible、ChassisThermal ThresholdNon Recoverable	Unreachable、VMDown、HostConnection Failure、ネットワーク ConnectivityLost	UCS シャーシ ダウン	主なイベントの1つが発生した場合。	5	NA

相関ルールの名前	アラームを発生させる主なイベント	主なイベントが原因で発生する現象イベント	相関アラームの名前	相関アラームが発生するタイミング	主なイベントと現象イベントを受信する（最小）時間枠	発生回数
エンドポイント Unreg しきい値 (Threshold) Exceeded 電話 未登録 しきい値 (Threshold) Exceeded	該当なし	該当なし	エンドポイント Unreg しきい値 (Threshold) Exceeded 電話 未登録 しきい値 (Threshold) Exceeded	該当なし	該当なし	該当なし
サービス品質 しきい値 (Threshold) Crossed	該当なし	該当なし	サービス品質 しきい値 (Threshold) Crossed	該当なし	該当なし	該当なし

[ イベントのカスタマイズ (Event Customization) ] ページの上部で、使用可能な検索オプションを使用してイベントを検索してフィルタすることができます。ただし、[ 関連付けルール (Correlation Rules) ] の下にリストされているイベントについては、イベントの名前が一意ではなく、[ イベントのカスタマイズ (Event Customization) ] ページの他のタブにリストされたイベントと名前が同じ場合に、名前ベースの検索が機能しません。[ 相関ルール (Correlation Rules) ] タブでイベントを検索するには、相関ルールの名前を使用します。

#### Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以降の場合

イベントまたはアラームに関する追加情報を [ 電子メールのメモ (Notes for Email) ] に追加できます。メモは1000文字以内でなくてはなりません。また、[ 編集 (Edit) ] や [ 削除 (Delete) ] のリンクを使用して、[ 電子メールのメモ (Notes for Email) ] を編集または削除することもで



きます。メモを編集する場合は、少なくとも 1 文字を [電子メール用メモ (Notes for Email)] に残しておきます。この追加情報は、通知として電子メールで送信されます。

ドル (\$)、縦線 (|)、チルダ (~) などの特殊文字を [電子メールのメモ (Notes for Email)] に追加することは推奨されていません。

Cisco Prime Collaboration Assurance のすべての関連ルールで、アラーム抑制ロジックがデフォルトで適用されます。指定された時間枠内でイベント A またはイベント B が発生した場合、最初に、関連アラームが対応するイベントと共にトリガーされます。個々のイベントのアラームは、関連の条件を満たさないまま指定された時間枠が経過した後にのみ発生します。たとえば、ロガー、PG、またはルータなどの Unified CCE コンポーネントがダウンすると、Cisco Prime Collaboration Assurance は、関連アラームと一連のイベントを生成します。イベントのアラームは、10 分の時間間隔を過ぎても関連が起きなかった場合にのみ発生します。アラーム抑制を無効にするには、関連ルールを選択して [編集 (Edit)] をクリックします。[関連ルールの編集 (Edit Correlation Rule)] ページで、[アラーム抑制を無効にする (Disable Alarm Suppression)] チェックボックスをオンにし、[保存 (Save)] をクリックします。



(注) 関連ルールに対してアラーム抑制ロジックを無効にしても、その関連ルールのイベントの部分を生成できないわけではありません。イベントが 2 つ以上の関連ルールに含まれ、かつアラーム抑制ロジックがそのいずれかのルールに適用されている場合は、もう一方のルールが優先されてイベントが発生する可能性があります。

VMware vCenter Server のアラームのトリガー：VMware vCenter Server (vCenter) のトリガーを無効化または変更すると、vCenter アラームの生成がブロックされるので避けてください。これらのトリガーのリストについては、Cisco Prime Collaboration Assurance 11.0 の場合は『[Setting Up Devices for Cisco Prime Collaboration Assurance 11.0 Wiki ページ](#)』を、Cisco Prime Collaboration Assurance 11.5 の場合は『[Prime Collaboration Assurance 11.5 のデバイス設定](#)』を参照してください。VMware vCenter Server のイベントとアラームのリストを表示するには、『[Cisco Prime Collaboration でサポートされているアラームとイベント](#)』を参照してください。VMware vCenter Server (vCenter) の詳細については、『[vSphere - ESX and VCenter Datacenter 管理者ガイド](#)』を参照してください。

## カスタムアラートの作成

カスタムアラートを作成できます。しきい値およびアラート トリガー パラメータを含めることもできます。パラメータの詳細については、「[カスタムアラートのパラメータ](#)」を参照してください。

カスタムアラートを作成するには

### ステップ 1 Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

移行方法 [アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [しきい値ルール (Threshold Rules)]。

また、作成したカスタムダッシュボードからイベントを直接追加することもできます。

**ステップ 2** [Add Event] をクリックします。

**ステップ 3** [New Performance Counter Event] ページで、以下を実行します。

- a) クラスタおよびサーバを指定します。
- b) [Available Counters] ドロップダウン リストからカウンタを選択します。

Cisco Prime Collaboration Assuran を MSP モードでインストールした場合は、サーバとカウンタを選択すると、パブリック IP アドレスが表示されます。ただし、特定のパフォーマンスカウンタまたはデバイスが Cisco Prime Collaboration Assurance で追加または管理されていない場合は、これらのノードのカスタム イベントを作成したり追加したりすることはできません。

また、[Cluster] ドロップダウン リストには、（グローバルフィルタのドロップダウンから選択された）特定の顧客に属している製品とクラスタのみが表示されます。

- c) 説明と推奨処置を追加します。これは任意です。
- d) モニタリングのしきい値、持続時間および頻度、ならびにスケジュールを指定します。
- e) [Save] をクリックします。

(注) デバイス上のパフォーマンスカウンタに対して作成されたしきい値ルールは、データベースに保存されます。これにより、カウンタの値が、しきい値ルールで定義されたしきい値の条件に違反した場合にアラームが生成されます。ページポリシーの詳細については、『[Cisco Prime Collaboration Assurance ガイド—Advanced](#)』の「ページポリシー」の章を参照してください。

## カスタムアラートのパラメータ

ユーザがカスタムアラートに指定できるパラメータを表に示します。

設定	説明
しきい値	<p>チェックボックスをオンにして適用する値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Over] : このチェックボックスをオンにして、アラート通知がアクティブになる前に一致する必要がある最大しきい値を設定します。[以上 (Over) ] の値フィールドには、値を入力します。たとえば、進行中のコールの数と等しい値を入力します。</li> <li>• [Under] : このチェックボックスをオンにして、アラート通知がアクティブになる前に一致する必要がある最小しきい値を設定します。[以下 (Under) ] の値フィールドには、値を入力します。たとえば、進行中のコールの数と等しい値を入力します。</li> </ul> <p>(注) これらのチェックボックスは、[頻度 (Frequency) ] および [スケジュール (Schedule) ] の設定パラメータと組み合わせて使用します。</p>

設定	説明
値	
	<p>適用するオプション ボタンをクリックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Absolute] : データの現在の状態を表示する場合に選択します。これらのカウンタ値は累積されます。</li> <li>• [Delta] : 現在のカウンタ値と前回のカウンタ値の差分を表示する場合に選択します。</li> <li>• [Delta Percentage] : カウンタ パフォーマンスの変化を比率で表示する場合に選択します。</li> </ul>
持続時間	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Trigger alert only when value constantly...</li> <li>• Trigger immediately</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [Trigger alert only when value constantly...] : 指定時間 (秒) 内に値が常にしきい値の下限または上限を超える場合に限りアラート通知を送信する場合、このオプション ボタンをクリックして、アラートを送信するまでの指定秒数を入力します。</li> <li>• [Trigger immediately] : アラート通知をすぐに送信する場合は、このオプション ボタンをクリックします。</li> </ul>
頻度	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Trigger on every poll</li> <li>• Trigger &lt;&gt; events within &lt;&gt; minutes</li> </ul>	<p>適用するオプション ボタンをクリックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Trigger on every poll] : 各ポーリングでしきい値条件が一致したときにアラート通知をアクティブにする場合は、このオプション ボタンをクリックします。</li> </ul> <p>たとえば、進行中のコールが継続的にしきい値の上限または下限を超える場合、システムは別のアラート通知を送信しません。しきい値が通常値 (進行中のコール数が 50 ~ 100) の場合、システムはアラート通知を非アクティブにしますが、値がしきい値の上限または下限を再び超えた場合、システムはアラート通知を再びアクティブにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Trigger &lt;&gt; events within &lt;&gt; minutes] : 特定の間隔でアラート通知をアクティブにする場合は、このオプション ボタンをクリックし、送信するアラートと、何分以内に送信するかを入力します。</li> </ul>
スケジュール	

設定	説明
<ul style="list-style-type: none"> <li>• Trigger immediately (Non-stop monitoring)</li> <li>• Schedule between &lt;&gt; to &lt;&gt;</li> </ul>	<p>適用するオプション ボタンをクリックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Trigger immediately (Non-stop monitoring)] : アラートを 1 日 24 時間送信する場合は、このオプション ボタンをクリックします。</li> <li>• [Schedule between &lt;&gt; to &lt;&gt;] : アラート通知を特定のタイム フレームでアクティブにする場合は、このオプション ボタンをクリックし、開始時刻と停止時刻を入力します。このチェックボックスがオンになっている場合は、日次タスクの開始時間と停止時間を入力します。たとえば、カウンタを毎日午前 9 時から午後 5 時まで、または午後 9 時から午前 9 時までチェックするように設定することができます。</li> </ul>

## System

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以降の場合

および

### Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合

Cisco Prime Collaboration Assurance の事前定義されたすべてのアラームとイベントを次の通り表示できます。[アラームおよびレポートの管理 (Alarm & Report Administration)] > [イベントのカスタマイズ (Event Customization)] > [システム (System)]。

システムタブには、次の情報が表示されます。

- 名前
- カテゴリ
- ステータス
- 重大度
- デフォルトの重大度
- Cisco Prime Collaboration リリース 11.1 以降の場合  
シスコの規則
- Cisco Prime Collaboration リリース 11.5 以降の場合  
例外インジケータ
- 電子メール用のメモ



- (注) イベントまたはアラームに関する追加情報を **[電子メールのメモ (Notes for Email)]** に追加できます。メモは1000文字以内でなくてはなりません。また、**[編集 (Edit)]** や **[削除 (Delete)]** のリンクを使用して、**[電子メールのメモ (Notes for Email)]** を編集または削除することもできます。メモを編集する場合は、少なくとも1文字を **[電子メール用メモ (Notes for Email)]** に残しておきます。この追加情報は、通知として電子メールで送信されます。

ドル (\$)、縦線 (|)、チルダ (~) などの特殊文字を **[電子メールのメモ (Notes for Email)]** に追加することは推奨されていません。

次の操作を実行できます。

アクション	説明
重大度の変更	名前のチェックボックスをオンにする：すべてのイベントを選択するか、選択するイベントのチェックボックスをオンにして、 <b>[重大度の変更 (Change Severity)]</b> をクリックします。
イベントの生成または抑制	名前のチェックボックスをオンにする：すべてのイベントを選択するか、選択するイベントのチェックボックスをオンにして、 <b>[生成 (Raise)]</b> または <b>[抑制 (Suppress)]</b> をクリックします。

